

平成19年度グローバルCOEプログラムに採択

東アジア文化交渉学の教育研究拠点形成

—周縁アプローチによる新たな東アジア文化像の創出—

複合的な視点から「文化交渉学」を発信

平成19年度のグローバルCOEプログラムに、関西大学が申請した「東アジア文化交渉学の教育研究拠点形成—周縁アプローチによる新たな東アジア文化像の創出—」が採択されました。今後5年計画で「文化交渉学」という新たな学問分野を切り拓き、国際舞台で活躍する関西大学発の若手人材を育成する教育研究拠点を形成していくことになります。拠点リーダーの陶徳民教授(大学院文学研究科総合人文学専攻・中国文学専修)とサブリーダーの藤田高夫教授(大学院文学研究科総合人文学専攻・史学専修)に意気込みを語ってもらいました。



平成20年度に「文化交渉学専攻」博士課程を開設

採択されたグローバルCOE拠点は、東アジア世界における文化交渉の諸相を教育研究対象とし、地域文化の相互接触・衝突・変容・融合を動的に把握する「文化交渉学」という新たな学問分野の創生を目的としています。これは東アジアにおける文化を、多様な国々からの視点で、複数の人文学的方向から複合的に把握することのできる人材を養成するものです。

人材養成と研究の拠点としては、文学研究科を改組し、平成20年度に「文化交渉学専攻」を博士課程前期課程・後期課程同時に開設します。本プログラムの核となる後期課程においては、学生の半数は留学生とする予定です。

グローバルCOE◆世界をリードする創造的な人材を育成

今年度から始まったグローバルCOEプログラムは、文部科学省が実施してきた「21世紀COEプログラム」を受け継ぐ事業です。わが国の大学院の教育研究機能を一層充実・強化し、世界最高水準の研究基盤の下で世界をリードする創造的な人材育成を図るため、国際的に卓越した教育研究拠点の形成を重点的に支援し、国際競争力のある大学づくりを推進することを目的としています。

今回は全国の国公私立大学111校・281件(私立大学は36校・59件)の申請があり、28校・63件が選ばれました。このうち私学で採択されたのは、本学を含む4校・10件のみでした。

「関西大学のアジア学の資産と伝統を継承し、国際的発信力を持つ若手研究者を育てたい」

基盤となる研究資源と拠点形成の目的

●大学院文学研究科総合人文学専攻・中国文学専修 陶徳民教授 (拠点リーダー)



われわれは、関西大学のこれまでのアジア学の伝統を継承し発展させていくことが重要だと考えています。本学には可能性に満ちたアジア文化研究の基盤となる学術資源がそろっています。江戸時代に懐徳堂、適塾と並び称された私塾である泊園書院の2万冊余りの「泊園文庫」。東洋史学の創始者である内藤湖南博士の蔵書3万3千冊を有する「内藤文庫」。魯迅研究者で魯迅の弟子であった増田涉氏(元本学文学部教授)の「増田文庫」1万5千冊。日本を代表する書誌学者の長澤規矩也博士の「長澤文庫」。外交官の吉田伊三郎氏が収集したアジア関係・外交関係の和漢洋書2400冊。日本近世文学の第一人者の中村幸彦氏(元本学文学部教授)の「中村幸彦文庫」など。これらの文庫が常に図書館にあり、特に貴重なもの以外はいつでも教員や学生が触れることができます。豊富な学術資源へのアクセスの良さも、本学の研究環境の特長です。

また、アジア文化交流研究センターでは、中国の典籍1万種全文の総合データベースである世界最大規模の「中国基本古籍庫」を、他大学に先駆けて導入しました。稀覯書の文字デー

タ・版画像の連結データベース「近代漢語文献データベース」もあります。

この日本有数の研究環境が、今回のグローバルCOEプログラムを実施する基盤になります。この事業を推進するメンバー13人は、全員が関西大学の教員であり、東アジアというエリアと文化交渉というテーマに接点を持つ研究者が集まっています。このコアのメンバー以外に、外部の先生方にも参加してもらいます。リーダーシップを発揮できる若手研究者を育てるために、最短距離で世界最高水準に接することができる環境を提供する予定です。

教育研究拠点形成の目的をまとめると、次の通りです。

- ◆複合的アジア文化観を持つ人材の育成
東アジア世界を多対多関係の織りなす文化的複合体としてとらえ、それに立脚して学術研究のみならず、国際交流や国際理解のための機関・組織で主導的役割を果たす人材を養成する。
- ◆国際的発信力を持つ自立した若手研究者の輩出
世界標準としての3カ国語(英語、2アジア語)の運用能力を持ち、グローバルな人的ネットワークの中で世界水準を意識しながら活動できる自立した若手研究者を養成する。
- ◆新たなディシプリンとしての文化交渉学の構築
「周縁アプローチ」による研究視角の転換と文化接触の動的把握によって、従来の一国主義的な東アジア文化研究を革新し、文化交渉学という学問領域を新たなディシプリンとして世界に先駆けて構築する。
- ◆国際的研究ハブの形成
各国で個別に行われている文化交流研究・対外関係史研究などを国際的ネットワークで結びつけ、東アジア各地域の文化研究をリードする国際的教育研究機関を形成する。

「国とディシプリンを越境する研究で、新たに東アジア文化像をとらえ直そう」

グローバルCOEプログラムの内容と特徴

●大学院文学研究科総合人文学専攻・史学専修 藤田高夫教授 (拠点サブリーダー)



◇「文化交流」から「文化交渉」へ

関西大学の今までの蓄積を「文化交流」という枠組みでくくるなら、今回われわれが「文化交渉」という別の言葉を使ったのは、より広い学問体系として文化交渉学というものを構築するためです。

ぜひ越えたいものが二つあります。一つは国を越えたい。日本と中国という一国対一国の関係ではなく、東アジア全体を視野に入れて考えていきたいのです。もう一つ越えたいのは、各学問分野の垣根です。例えば、歴史学、言語学、文学、思想、宗教といった学問分野の中でやってきたことを、その枠を越えて互いにそれぞれの考え方や成果をぶつけ合わせていきたい。

若手研究者に越境してほしいのは、国とディシプリン。この二つを越えて、それぞれの確かな研究蓄積の上に、同時に他の学問分野に対して開いていく姿勢を身につけてほしいし、それが従来の文化交流研究をさらに発展させていくことになると思います。

◇フィールドワークを伴う現地調査を実施

中国研究を例にとると、従来の中国研究は、最も中国的なコアな部分に集中して、そうでない周縁部分をそぎ落としてきました。つまり、中心の部分から中国文化のエッセンスを抽出しようとする研究方法です。しかし、そのように切り捨ててきた周縁の部分にこそ、実はたいへん豊かな可能性を持ったものがあると考えています。むしろ周縁に立脚して、周縁から中心を見ることによって初めて見えてくる中国文化像の提示は、周りにいる人間だからできることです。これを「周縁アプローチ」と呼んでいます。

具体的なテーマはいろいろあるのですが、院生やポストドクトラルフェローのような若手研究者を、文化交渉上の重要地域に送り込むというプロジェクトを計画しています。例えば、絶えず外国との窓口であった長崎や対馬、琉球、アモイ、マカオ、台南、シンガポールなど、さまざまな異文化との接触の現場となったところで行う、フィールドワークを伴う現地調査を組み込んだ教育プログラムです。これを「周縁プロジェクト」と呼んでいます。

若いうちから20年後、30年後にそれぞれの国の学会を背負って立つであろう研究者との世界的なネットワークを、自ら構築しつつ歩んでほしい。一定の業績をあげて外国に出て行くというのではなく、最高水準の世界が初めからすぐそばにあるような環境で、リーダーシップを備えた創造的な研究者を育てたいと思います。

さらに、COE拠点の最終形態として、文化交渉学研究機構の下に独立大学院「文化交渉学研究科」の設置も視野に入れていきます。